

2018年

# 美術検定

1 級問題

— 禁無断転載 —

© 2018 美術検定実行委員会

配点 問題A = 各 5 点 問題B = 75 点

**問題A** 鈴木さんと田中さんは、アートプロジェクトについて話し合っています。2人の会話を参照して、続く設問に答えてください。

【2人の会話】

**鈴木**：今年は「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」の開催される年だね。同じ新潟県の違うエリアでは「水と土の芸術祭」も開催されている。

**田中**：来年は「瀬戸内国際芸術祭」と「あいちトリエンナーレ」があるね。こういったアートイベントには都市型と地方型があるけれど、どちらにもサイトスペシフィックな作品①が多く出品される。建物のリノベーション②も行われているよね。美術館で開催される展覧会とは全く趣きが違う。

**鈴木**：このようなアートプロジェクトは2000年代になって急増してきたね。それには何か理由があるのかな？

**田中**：それは、1990年以降の日本社会にいろいろと起きていることが関係しているだろうね。経済効果や政治的施策とか、③ など、アートが社会の文脈からもとらえられるようになったし。

**鈴木**：なるほど。その一方で、このようなプロジェクトの流行には、賛否両論があることは忘れてはいけないね。プロジェクトの意義や成功の基準について慎重に考えるべき④という人もいるよ。

**Q1** 以下のうち、下線部①の作品例の組み合わせとして、適切なものはどれですか。



【選択肢】

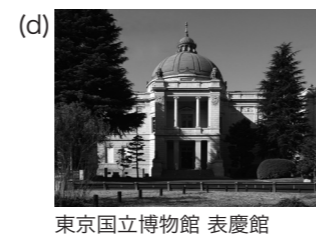
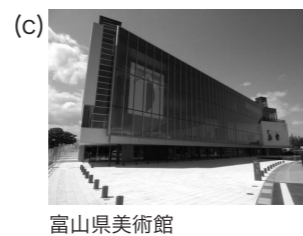
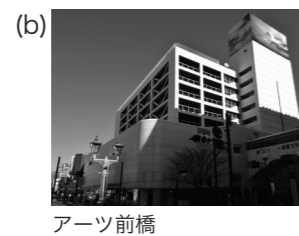
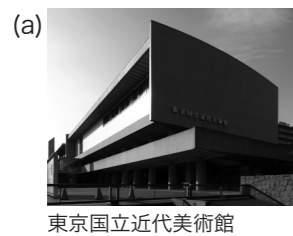
- ① あ — い      ② い — う      ③ う — え      ④ え — あ

**Q2** 下線部②が示すようなリノベーションの定義と建築例の組み合わせとして、最も適切なものはどれですか。

【定義】

- (ア) 経年変化により劣化した設備を改修のうえ、再び使用できるようにした施設。  
(イ) 遊休施設などを、改修のうえ、異なる目的のために転用すること。  
(ウ) 設計が古く、新たな要求に耐えられなくなった施設を、目的を変えずにできる限り近隣に新築移転すること。  
(エ) 竣工は古いが、文化財的な価値が高い建築物を、なるべく手を加えずに保存すること。

【建築例】



【選択肢】

- ① ア — a      ② イ — b      ③ ウ — a      ④ エ — c      ⑤ ア — b      ⑥ イ — d

**Q3** 2人の発言から、③ に入る文章として、最もふさわしいのは以下のうちどれですか。

【選択肢】

- ① 格差社会化の結果、アートが超富裕層にとって可処分所得の長期的な投資先になりつつある  
② 爆買いや従来型の観光地では満足できないアジアからの観光客が、アートを目的に来日する  
③ 災害からの復興や都市の空洞化、地方の人口減少に対する処方箋の1つとして、アートの機能が考えられるようになった  
④ 2020年の東京オリンピックの成功に、アートをはじめ、軽んじられていた日本の文化芸術のレベル誇示が必要

**Q4** 下線部④のような考えの根拠として、実際に危惧されている事項の適切な組み合わせはどれですか。

【事項】

- (a) アートプロジェクトが実施されるエリアでは、深刻な治安悪化が起きている。  
(b) 一部の企業が大手広告代理店を通して運営資金を投入し、広告メディアとして利用している。  
(c) プロジェクトはほとんどの場合補助金を得て運営しているが、公的資金の支出方法として、個人の嗜好が反映される文化芸術は法的に問題がある。  
(d) プロジェクトの中には自治体が抱きがちな横並び意識によって立ち上げられ、必要性が精査されていない事例が多いため、一時的な流行に終わる可能性がある。  
(e) 文化芸術が地域振興などほかの目的のために回収され、また成功例が美談化される傾向がある。

【選択肢】

- ① a — b  
② b — c  
③ c — e  
④ d — e

**Q5** 2人はさらに、アートプロジェクトのモデルケースとして「ミュンスター・スカルプチャー・プロジェクト」を採り上げ、アートプロジェクトの有効性を話しました。このプロジェクトを採り上げた理由として、最もふさわしいものはどれですか。

【選択肢】

- ① 企画主体と市民との関係が長期間をかけてよい形で構築されてきている。  
② 地場産業が成功しており、潤沢な予算を文化に投資している。  
③ 外国人観光客の誘致に成功し、経済効果をもたらしている。  
④ 東西ドイツ統一の象徴として、広くプロジェクトが認知されている。

問題B

あなたは教育普及のボランティアとして、A市で開催される展覧会の一般来館者に配布する鑑賞手引きを書くことになりました。

展覧会のテーマは「母子像にみる神聖性と愛情の表現」です。

下に示す2点の展示作品の共通性や違いなどを比較しながら、来館者がテーマを理解し、鑑賞を深めることができるような手引きを書いてください。

解答の記述にあたっては、以下を条件とします。

- [資料A] ～ [資料C] を適切に用いること
  - 序論（目安200字）、本論（目安600字）、結論（目安200字）の構造を踏まえること
  - 1000字以内で書くこと

※解答は会話調の文章ではなく、通常の書き言葉を使用すること。

[作品]



《聖者と聖母子》 6世紀頃のイコン  
エンカウスティック（蠟画）・杉板  
聖カテリーナ修道院蔵、シナイ山（エジプト）



メアリー・カサット《家族》 1893年  
油彩・キャンヴァス 81.9×66.4cm  
クライスラー美術館蔵、ノーフォーク（アメリカ）

[資料A] メアリー・カサット略歴

1844年アメリカ生まれ、1926年没。  
19世紀後半のパリで活躍した、アメリカの富裕層出身の画家。1874年にエドガー・ドガの作品に出会い、印象派展に参加。明るい色彩と軽やかなタッチで身近な人々や家庭の情景を描いた。とくに母子を描いた作品は多くの人々の共感を得て、「母子像の画家」とも呼ばれた。1890年代には浮世絵から影響を受けて版画制作にも携わり、平面性や画面構成などを油彩画にも応用している。また、アメリカでの印象派コレクション形成の立役者でもあった。加えて、女性の職業画家が少なかった時代に、母国での女性画家の地位確立にも貢献した。

[資料B] ビザンティン美術とイコンの作品解説

聖母子は受肉（インカーネーション）の教義を象徴する図像であった。神がイエス・キリストという人の形をとったように、我々は「神の形」であるイコンを拝むことができるのである。……ビザンティン美術が切実に望んだのは、人を人らしく描くことではなくて、神を神に相応しい姿で表すことであった。……眼に見えないものを眼にみえるようにすることを、（ビザンティンの画家は）欲したのである。……中世美術には、現実の空間に還元されるような三次元的表現は存在しないし、聖なる人物が横顔で表されたり、ましてや後ろ向きに描かれることは決してなかったから、光輪も記号的な容易さで使用された。

（益田朋幸「ビザンティン美術へのチチェローネ」『ビザンティン美術への旅』平凡社、1995年 p.232-238より抜粋・引用。（）は出題者付記）

聖母は中央の玉座に端正に座る。青紫の衣の裾から赤い履物の爪先がのぞいている。その左右に聖人たちが立つ。右が聖ゲオルギオス、左が聖テオドロスカと思われる。聖母の背後には二人の天使がいて、天より差し出される神の手のほうを振り仰いでいる。天使は白く半透明に描かれ、天使の霊的な性格が巧みに表現されている。……天使たちが古代絵画の伝統にのっとして、立体感と動きをもって自然主義的に描かれているのと対照的に、前列左右の聖人たちの顔は平面的で表情をもたず抽象的である。聖母子の身体は丸みを帯びてはいるが、天使たちとは異なるところどころモデリングに正確さが欠けている。両側の聖人たちがこちらを凝視して観者と強いコンタクトを持つのに対し、聖母とキリストは目をそらしており、それだけわれわれから距離を置いて神性が強調されているように感じられる。

（浅野和生『世界美術大全集 6 ビザンティン美術』小学館、1997年 p.361-362より引用）

[資料C] カサットの作品解説

椅子に腰掛けて裸の幼子を抱く母親の傍らに、金髪の少女が寄り添う。しっかりと幼子を支える母親の両手と慈愛に満ちた眼差し、幼子のふっくらとした体つきなど、母子像としての魅力を余すところなく伝えている。幼子を向く母親の視線と、幼子と少女が交わす視線によって、観る者の視線はおのずと画面中心へと引き込まれていく……明確な輪郭線とやや平面的な描写、そして安定した構図が採用されている。ピラミッド形の人物配置は、ラファエロやボッティチェリなどの聖母子像にヒントを得たと推察できる。一方で少女が手にした赤いカーネーションは、伝統的な聖母子像ではキリストの受難の予兆の寓意として描かれることから、ひとときの幸福とともに子どもの将来を案じる母親の憂いが暗示される。

（牧口千夏「カタログ：Ⅲ．新しい表現、新しい女性」『メアリー・カサット展』図録、横浜美術館、2016年 p.116より抜粋・引用）

野外の情景であることもこの絵がわれわれの興味を惹く重要な点である。それによって人物たちは、育児室や私邸の庭といった、彼女の絵が普通そうであるようなもっと閉鎖的な状況設定———事実、そうした情景をのちに描いている———の外へ移され、普遍化されているのである。……断乎として非宗教的かつ同時代的なものであって、多大な関心がドレスの細部へと払われ、画面全域は明るい調子の色彩で塗られている。……カサットの視像（ヴィジョン）の新鮮さ、依然として愛情と信頼によって一つに結ばれた現代の家族を描いたその視像の新鮮さが強く印象づけられるのである。

（アリソン・エフェニー著・松本透訳『岩波 世界の巨匠 カサット』岩波書店、1996年 p.108より抜粋・引用）